会報

ＴＵＷＶＯＢ会　Ｎｏ．５１　　２０２０．１２．２５

✧　2021 年１月の新年会を中止します。
　　新型コロナ感染者が増加している状況を考慮し、2021 年１月に開催予定の新年会を中止します。また開催できる日が早く来ることを祈ります。
✧　ホームページ http://tuwvob.yamagomori.com/　（新しくなりました）
✧　メールアドレスの変更は事務局（８期 佐藤）までご連絡ください。
✧　ＯＢ会報は郵送を止め、原則として TUWVOB 会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は事務局までご連絡ください。taku0412.and.ogya113@outlook.com

---

今でもワンゲル現役の気分で------

２期（昭和３８年卒）池田 幸男

ＯＢ会の幹事の方から会報の原稿募集の案内があり、「そういえば数年前に投稿したことがあったなァ、久し振りに投稿してみようか。」という気になった。案内文には、「近況報告は数行でもいい。」と書いてあることだし-------。　ということで、一体前回は何を書いたんだろうと、「卒年期別投稿記事」を読み返してみた。
読んでみて驚いた。「今考えてること、言っていること、やっていること」と全く同じではないか！！
ま、年とともに山遊び日数や山行の内容が安易に流れているのはしょうがないとして-------。
７０代後半になると、体力の衰えを自覚せざるを得なくなる。
その自覚を定量化するために、数年前から「自主体力検定」と称して、毎年単独で立山の支稜線にある大日岳の日帰り山行をしている。累積高度差は約１６００ｍ。途中に大日平という気持ちはいいけど、ほとんど高度の稼げない部分がある。
７０代前半の頃は全くの余裕。大日岳では昼飯には早いし人は多いしで、中大日の方にとって返し、秘密の誰も来ない絶景ポイントでのびり、ビール付の昼食にしたものだった。
今年はというと、なんとかなるだろうと８０才記念を兼ねて出発したものの、予想よりペース上がらず。そこに、全く偶然に追いついていた若い（と言っても７０台前半のスーパーマン）山仲間に、「今日は一緒に行きましょう」と言われ、後からの激励（煽て？）でなんとか登頂。当然過去最長所要時間であった。
今でも「山はマイペースで歩くもの」と思っているし、１～２時間ならノンストップでも問題ない。しかし、当然ながらマイペースでは行ける範囲がドンドン狭くなる。
最近流行のトレランに刺激されたわけではないが、大日山行以降に、勝手知ったる低山でタイムトライアル的なものを始めてみた。

「剣岳遠望」

今までのマイペース１時間分を５０分に縮めることが出来ても、それを４５分にするのがどれほど大変な事か実感した。はたして、来年の大日岳はどうなるだろうか？ 体力検定の対象の山を、変更することになってる可能性も十分ありそうだ。

そろそろ、楽しみにしている「低山カンジキハイク」のシーズンだ。
近年降雪量が少なく、ヤブがなかなか埋まらない。例年並みくらい降ってくれるといいのだが。

さて、これからが言いたいことの本題（？）。
僕は卒業後も転勤による一時期を除いて、ほぼズーッと山に行き続けていた。
山が本当に好きなら、今現役の人は勿論若い人は、今後も山行を続けて下さい。
８０才までは山を楽しめることを保証します！！？？
ある程度のブランクがある人は、保証の限りではありません（笑）。

焚き火

４期（昭和４０年卒）「大東磐司」改め「山野彷徨爺」こと 小原佑一

最近、第何次かのアウトドアブームとかで「グランピング」とかいう超豪華なホテル泊のようなキャンプが話題になっています。 一方、COVID-19 の感染で「ソロキャンプ」という形で「グランピング」に逆行するような個人単独タイプの簡素なキャンプもはやっていうようです。グランピングに焚き火は場違いかもしれませんがソロキャンプでは焚き火を大いに楽しんでいるようです。

キャンプで欠かせなかったのが「焚き火」！！　最近、山と渓谷社から「焚き火の本」という書籍が出版されたのを新聞広告で見つけ、早速図書館から借りてきて読んでみました。 ただ、その焚き火もずいぶん変わってしまったようです。

ワンゲル新人時代（半世紀以上昔）、一日重いザックを背負って歩き通して夕方テントサイトに着くとクタクタの身体でまずは薪集め！　林の中、潅木や雑草を掻き分け、時にはハイマツの下に潜り込んで適当な枯れ枝を捜し出して引っぱってきたものです。
集めた薪で火を起こし、夕食の準備！　雨など降っていたら最悪。焚き火が上手く燃えなければ、おこげ・生煮え・芯あり・粥は当たり前！当時は一人飯盒一個で１日分、食べなきゃ持たないので上手く炊けていなくても無理やりかけ込みました。

焚き火の上手な人は本当に尊敬しました。雨が降っていようが、薪が湿っていようがマッチ３本で火を起せなかったらダメだとも言われました。ザックには必ず濡れないようにプラスチックの袋で厳重に保護した古新聞をたきつけように入れていました。

フリーの山行では良く食事が終わるとパチパチと音を立てながら揺らいでいる炎を静かに眺めていました。

最近、焚き火は木炭を使うバーベキュウやダッチオブンを使いとき以外あまり調理には活用されていないようです。炊事はもっぱら液化ガスカートリッジやガソリンのバーナー。焚き火はもっぱら炎を楽しむため。

最近、北欧のテレビ局が焚き火の炎の映像と音だけを長時間放送し、それが大変好評だったとのことで日本のラジオで焚き火の音だけを長時間放送したそうです。ユーチューブで「焚き火」を検索すると焚き火の動画が沢山みつかります。

甥っ子が信州の秘密基地と称している私のところに来てバーベキュウの後、薪を少しずつくべながら焚き火を楽しんでいました。ただ下を見ると金属の入れ物の中で燃やしていました。「それ何だ？」と聞いたら「焚き火台 知らないの！」と馬鹿にされてしまいました。焚き火の火で地面を損なわないように今は直接地面で焚き火をすることはないとのこと。

ここ秘密基地は明治時代に火災で焼けてしまった屋敷跡なので土台に使っていた大小いろいろな石が出てきます。畑の脇にのけておいた石を見て、この石を並べて直火で焚き火が楽しめるよう焚き火用の炉を作ってみました。これなら安心して直火で焚き火をたっぷり楽しめます。

冷たいビールを呑みながら炎を見ていたら、石窯でも作ってピザを焼いたら、なんて考えてしまいました。

でも調べてみるとそこらに転がっている石ころで石窯を作るのは難しそう。とりあえず耐火煉瓦を積み木細工のように積み上げるだけでも簡単なピザ窯が作れそうだとわかったので挑戦してみた。約 50 個の煉瓦はモルタルで固定せず、ただ積み上げるだけにして組み替え、撤去が簡単に出来るようにした。薪を燃やすと積んだ煉瓦の間から炎や煙が少し漏れてくるが窯の中の温度は軽く 300 度を越えるのでピザを焼くには十分。熱々の焼き立てピザが食べられます。

焚き火が終わったら、インドから買ってきた素焼きの深めの小皿に使い古した食用油を入れて火を点した灯明。真っ暗な庭をバックにゆっくりと揺れる小さな炎を楽しむ！　これまた風情がある！晴れていれば昼間は農作業に汗を流し、暗くなってからは静かに揺らいで燃える炎を眺めながら独り食事や酒を楽しむ、 これって贅沢だなぁ～～～！

焚き火

灯明

ピザを焼く

7 期生の近況報告

7 期（昭和４３年卒）真尾 征雄

7 期では、令和 2 年 6 月に会津で同期会を予定していた。國岡徹郎君が幹事長で詳細な計画ができ、東山温泉での会食に期待を膨らませていた。ところが新型コロナウイルスの感染が拡がり、延期せざるを得なくなった。会津での同期会を早くしたいと思っているが、いつになるか全くわからない。

当分リアルでの再会はできないようだから、メールで近況報告しようと呼びかけた。外出ができないでいる仲間から近況が届いてきた。ある時上田俊朗君から、「近況報告をまとめて文集を作ろう」と提案があり、上田君が「私が作る」と名乗り出てくれた。

2 月下旬、同期の山口正雄君の訃報が届いた。3 月 1 日通夜、2 日告別式。新型コロナの感染もまだそれほどひどくはなく、同期 7 人が参列し出棺時に部歌「放浪の歌」で見送った。

上田君作成の近況報告集は山口君追悼集として 6 月に郵送されてきた。17 人から原稿が寄せられカラー印刷で 42 頁の素晴らしい冊子で、良い記念品を作ってくれたと感謝している。編集後記に上田君がこんなことを書いているので紹介しよう。

《集まった同期の近況報告を見ていると人生の一端が見えてくる。山、桜の花、庭造り、合唱、料理、絵画、撮影、ペット、健康、家族等への愛情、愛読書、地元での活動などなど、今まで知らなかった部分も見えてきて大変興味深い。新たな発見がまた新たな交流を生むかも。》

6 月、コロナ感染は全国各地で拡大し、後期高齢者には巣ごもりする日が続いた。そこでオンライン飲み会をしたいねとの話が持ち上がった。この方面に強い大釜寛修君が世話人を買って出てくれた。「オンライン 7 期」と名称も決め月 1 回行うようになった。はじめは要領がわからず苦労したが次第に慣れ、10 人近くが参加し飲みながらおしゃべりを楽しんでいる。これなら遠隔地の人も、闘病中の人も、移動が難しい人も懐かしい顔を見ながらマイペースで参加できるので、高齢者には好都合なシステムである。

同期の高橋勝也君が 9 月に亡くなったことを喪中ハガキで知った。同期では誰も葬儀に出られなかった。11 月のオンライン 7 期で高橋勝也君を偲びたいと思っている。

以上、7 期生の近況報告です。後期高齢者となり各人それぞれどこかに心身の疾病を抱えています。このコロナ禍で巣ごもり状態がずっと続いていますが、7 期生はみんな前向きに生きています。コロナのおかげでかえって絆が強くなったように感じます。

青空に映える赤城の霧氷

８期（昭和 44 年卒）相原 敬

日本百名山の赤城山は、身近な山として老若男女に親しまれている。春にはアカヤシオが咲き乱れ、秋には紅葉狩りの人たちで溢れ、冬は華々しい霧氷に飾られる。群馬県民以外でも主に首都圏から大勢訪れる。今回は毎年楽しんでいる冬の赤城山を紹介しよう。

赤城山の霧氷シーズンは早ければ 11 月末に始まり 3 月位までは楽しめる。初冬の赤城は積雪量が少ないので、ほぼ夏道歩きで霧氷の林を歩けるのが良い。最も人気なのは主峰の黒檜山だが、標高差は 500m に満たないので黒檜から駒ヶ岳に周回する人が多い。

厳冬期ともなればコース中の岩や階段も雪に隠れ登りやすくなり、特に危険個所もない。週末ともなれば山の初心者も含めて多くの登山者が訪れるので、自ずとコースは出来上がってしまう。山頂まで樹林帯なので吹かれる心配もあまりない。鍋割山や荒山も根強い人気を誇る。

ただ難があるとすれば、前橋から赤城大沼に登る南面道路の凍結を忘れてはいけない。普通はスタッドレスタイヤを付けていれば問題ないが、極寒の日はスタッドレスも全然効かず、そんな日は転落や衝突事故が後を絶たないので群馬県警様の出番となる。それが心配な方は、前橋駅や麓の道の駅から路線バスを利用する手もある。

それ以上に問題なのは、霧氷ができる気象条件が読めないこと。天気予報図を眺めてみても霧氷のタイミングがつかめない。行ってみて霧氷ができていればラッキーだということになる。黒檜山のライブカメラが配信されているので、近くに住む私たちはカメラで確認して速攻出掛ける。

何時でも出かけられるようにスタンバイしている冬の赤城山である。

霧氷に覆われて真っ白に

霧氷のトンネルを歩く

「グリーンランド」 氷河の大地とオーロラ 紀行

８期（昭和４４年卒）三日月 道夫

コロナ禍の声が始まり騒がしくなる前　世界で一番大きい島「グリーンランド島」（デンマーク自治領）へ向かいました。　コペンハーゲン空港経由約５時間でグリーンランドの国際空港カンゲルルススアークへ更に小型航空機へ乗換えてイルリサットへ。昼間でも気温-15°の北極圏の街　世界遺産イルリサットは、先住民族イヌイットの言葉で“氷山の町”を意味し、規模・数ともに世界で最も氷山が生み出される場所です。このイルリサットに３連泊し、氷山展望ハイキング、オーロラ観賞、氷山クルーズを楽しみました。

夜にはお目当てのオーロラを極寒に耐えながら、毎晩見ることができ大満足です。（新月の時です）

オーロラ写真詳細

https://youtu.be/0ky8HYdpYQw　　https://youtu.be/WzRO7Mf5Rb0

世界に２つだけしか存在しない大陸氷床の一つ「グリーンランド氷床」。内陸氷床として厚さ数百メートル以上の氷の大地が東グリーンランドまで広がっています。カンゲルルススアーク近くで、この氷床の末端から、氷床上に上がり氷床ハイキングしながら目の前にそびえる大きな氷の断崖や、果てしなく続く氷の地平線を眺めることができました。

見るものを圧倒するスケール感、地球を直接肌で感じるダイナミックな自然。それは広大な氷河、自然が彫刻した芸術的な氷山、一度見たら虜になるオーロラの輝き、そんな魅力を満喫した　グリーンランドでした。

（2020 年 2/23～3/１）

コロナで右往左往 今年の山行

８期（昭和４４年卒）前田 吉彦

正月明けは女房と高尾山に出かけた。 晴れた山頂から、真っ白な富士山が大きい。 帰りは裏高尾の景信山に至り、そこから小仏バス停へ。 多くの登山者に追い越されるものの、一日の散歩としては十分。

２月初旬、コロナはまだ中国武漢の問題。 雪の少ない赤城山の荒山・鍋割山に単独で行く。 ここはトレーニングの場。 天気は良かったものの、北風が強い。 コース途中で、上越国境の山々が遠望できる。西から平標山、仙ノ倉山、万太郎山そして谷川岳。 ９年前、Ｏ君と二人で縦走した山々、懐かしく思い出す。

４月初旬に、ワンゲル仲間のＡ君夫妻とＭ君で、新潟の里山にカタクリを見に行く計画を進めていた。しかし４月７日の「緊急事態宣言発出」で急遽中止。

ＧＷの恒例行事、Ｏ君との残雪を楽しむ登山も同様断念。 「県境をまたぐ移動は控えましょう。」と報道されては、人の少ない山へ行くにも気が引ける。

結局 3-6 月は巣籠もり状態。 ただ近所の散歩は欠かさず続けていた。 地元自然観察会に所属している女房の案内で、近所の小さな雑木林で、キンラン、ギンランを鑑賞でき、驚く。

７月になって、筑波山に行く。 選んだコースはケーブルカー脇の表登山道。 連日の降雨で足下はひどいぬかるみ。 樹林帯の中で高温多湿、その上無風､大汗をかく。

そのリベンジもあって、８月初旬赤城黒檜山に行く。 ここは登山口から直ぐに急登。 尾根に着くまでにバテバテ。 リベンジどころか返り討ちに遭う。 標高の低い赤城山は、この時期絶対に登らない処。山の選択能力まで低下してきたか。

８月中旬、避暑を兼ね、夫婦で日光戦場ヶ原に。 人との接触を避けて日帰り。 赤沼から、小田代ヶ原に向う。 高山植物が花盛りなので、足が進まない。 戦場ヶ原の木道は昨年の大雨で一部損壊、コロナで補修が進まず、通行禁止。 再び小田代ヶ原へ戻る。

戦場ヶ原が快適だったので、８月下旬夫婦で霧ヶ峰高原へ出かける。 まだ宿泊する自信がなかったので、長距離運転を我慢して日帰り。 八島ヶ原湿原を半周して、蝶々深山から沢渡を巡る。 ここはこの時期初めて。 涼しく、快適。 夏の花も残り、秋の花も咲き出している。

９月初旬は、８・９期合同山行の時期。 今年は中止となり、Ｓ君と「剱が間近に見える山」に行こうと画策。 しかしまだ公共交通機関を使うためらいがあり、来年以降に延期。

９月中旬、Ａ君夫婦と一緒に、Ｍ君の北杜市の別荘を訪問。 久し振りの再会なので、実に楽しい。翌朝総員５人で花の百名山、入笠山に行く。 超楽ちんコースで花満喫。

ＧＷ恒例の残雪の山計画が流れたので、代わりに尾瀬に行くことをＯ君と計画。 10 月初旬山小屋の予約が取れた。 我々夫婦とＯ君の３人。 ところが直前で、Ｏ君が急用で不参加、台風接近予報もあり、主目的地のアヤメ平と至仏山を割愛し、鳩待峠から尾瀬ヶ原を周遊するコースに大幅変更。 静寂な紅葉風情を楽しめた。

近年、向かう先が「岳・山→高原・平」 と変ってきた。 時には岳や山も目指したいものだ。

キンラン

戦場ヶ原

霧ヶ峰

アケボノソウ

入笠山山頂

晩秋の尾瀬

懐かしの表磐司と二口小屋　５０年前にタイムスリップ

９期（昭和４５年卒）熊谷 久

１０月の好天の下、かねて見たかった姉滝のカラマツの紅葉を見に二口を訪ねた。平日ながら秋保大滝前の駐車場は混んでいた。確か馬場あたりで「二口林道開通 令和元年〇月」の掲示を見かけた。

確か前回はチェルノブイリ事故発生時、二口小屋に泊まり突然のニュースに世の終わり自覚したことを覚えている。あの時も二口峠まで林道は通じていたが、以後雪崩や土砂崩れで傷んだ林道を部分補修しながら安全が確保され再開されたものと察した。

本小屋バス停にはビジターセンターができ、磐司山荘は跡形もないが右手の昔からの一軒家は健在である。自転車を漕いで本小屋に着きこのお宅に自転車を預かって貰った。あの時は大東に登り夕日と駆けっこして樋ノ沢に下り、テン場では枯葉を集め相原さんのブレザーで眠った。

大東、大行沢分岐を過ぎて姉滝あたりまでは白線はないが車幅は広く快適。目的の姉滝で道路右手のカラマツは綺麗に紅葉していた。よく表磐司を歩いた時にこのカラマツを目印にし、また雨のときには慰められた。

磐司小屋跡前は少し広くなっている。一年の秋に磐司尾根を登るフリーを企画したことがある。夜来雷光があり翌日は磐司岩上部辺りから小雪となった。小笠原リーダーの掛け声の下、雪を被った枝をかき分けて登りピーク手前の尾根の分岐に出て一安心した。

右岸に渡り少し高度を稼ぐと車幅を広げてあり右後方に表磐司が楽しめる。やや進むと対岸に白糸の滝を見える所にゲートが設置してある。白糸の滝には苦い思い出が、一年の梅雨時期のフリーに行くこと

にしたが、夜中の大雨が気になり短波の気象通報を取り寝坊してしまい前田、水上両先輩に迷惑をかけてしまった。
コンクリート橋を左岸に渡り、小刻みに急カーブを登るとカラマツで視界が開け、少し上の左手に二口番所跡の駐車スペースがある。峠を目指し緩やかに高度を稼ぐ。途中仙台神室、日陰磐司そして表磐司を望める展望場所が設けられている。
この景観は雪のある時期でなければ行けない斜面からの眺めで、あの頃に紅葉を眺めるなど不可能に近かったものである。斜面を切り開かれた道路のお陰で枝葉に遮られることなく出現した。
３０年前と違い、舗装されガードレールと法面保護のコンクリートで守られ安心して運転し、車を止めて景色を楽しむことが可能となった。林道建設には反発していたが、歩行不自由な老人でもこの眺望を楽しめることは感慨深いものがある。
大きくターンして昔の道の樹林帯の脇を走り抜けると二口峠広場に出る。我々は龍ケ峰と呼んでいたピークを今は糸岳と言っているが、五段構えの登りは一次新鍊での最大の泣き所であった。私は県境稜線から山寺に下るコースの中で二口峠からが一番好きである。途中水の流れる火山岩を下るのが涼しげでまた安心して歩けた。残念ながら現在は荒れて通行不可とのこと。
峠でのんびりしていると、山寺側から上ってくる山形ナンバーの多さに驚く。この林道のお陰で山寺と秋保、作並を結ぶ周回観光ルートになり建設当初の目的が少し実現しているのを実感した。
酒田に戻るのが目的でないから、峠からは引き返した。下りは逆光で正面に仙台神室が眩しい。二年の秋のフリーで京野リーダーの下、秋の三神歩道を歩いたことがあった。少しでも早くと急かされて磐司小屋を発ち、清水峠経由で仙台神室に立ったとき、見事に赤く色づいた県境稜線と中央鎮座する大東に圧倒された。
二口番所跡スペースに車を止め苔むした石道をやや下る。すっかり成長した杉の木立でうす暗くなった処に二口小屋はあった。外観はもちろん、看板も内部も変わっていなかった。合宿時は泊まれず残雪期のフリーで逗留したことがあった。金子さんの指導でワカンを付け旧道の右手つまり沢筋でなく尾根を登って二口峠に出、下りは尾根筋の中間位置で仙台神室と日陰磐司の尾根を飽くこともなく眺めていたことがある。
小屋にはもう一つ思い出がある。学部の山好きを誘って、１日目は奥新川から駒新を横切り大東を越え小屋に泊まり、翌日は龍に登って山寺に降りたことがある。この時二口沢の水で淹れた紅茶（オレンジペコのティーバッグ）がとても綺麗で美味だった。
表磐司歩道の私の思い出を振り返ってみたが、残念なことは磐司小屋から二口小屋に至る右岸の旧道と二口小屋から二口峠に至る樹林帯の登り道が見当たらない。部分的に旧道の痕跡は残っているはずだが私の記憶と今の体調では辿ることはできない。
比較は無理だが TV で見た欧州の一本の道のように旧道を大切に保存する知恵と工夫がなかったことが残念でならない。

追伸　１１月８日の林道閉鎖前日も再度出掛けました。磐司小屋周辺の紅葉は見事でした。小屋の前で７期手戸様にお会いしました。

南部アフリカ、宮古島、八甲田山、奥入瀬渓流の旅

１０期（昭和４６年卒）田中 康則

１２月２７日（金）の夕方に羽田空港を出発。シンガポール、ヨハネスブルグを経てザンビアへ。バスでジンバブエのホテルで３連泊。まずはボツワナのチョベ国立公園でサファリ。翌日にビクトリアの滝を見学。ヨハネスブルグを経てケープタウン。喜望峰など見学。１月４日（土）にシンガポールを経て羽田空港。しばらく海外旅行はお休みになりました。

ザンビア側からのビクトリアの滝

喜望峰にて

８月８日（土）より３日間は宮古島へ。ブリーズベイマリーナで２泊。久しぶりに海水浴を楽しみました。

シギラ海水浴場にて

ホテルの部屋から見たプールと海

９月１９日（土）よりの４連休は、八戸から奥入瀬渓流、十和田湖そして八甲田山へ。
映画八甲田山では、青森５連隊が遭難した。青森から田茂木野、小峠、大峠、賽の河原、馬立場、鳴沢、田代温泉へと行く予定でした。鳴沢から田代までの２kmの道が分からず遭難。北八甲田連峰の赤倉岳、井戸岳に登山、当時に思いをはせました。

奥入瀬渓流にて

八甲田ロープウェイから登山

津軽の生活が２年目になりました

２２期（昭和５８年卒）　利根川　敏

昨年５月に青森県つがる市に赴任し１年７か月が過ぎました。近況報告をいたします。

今年は、新型コロナウイルス蔓延の影響もあり、出張はZoom会議に、東京に住む家族との会話もスマホのTV電話になるなど、青森県の県境を越える機会がほとんど無くなりました。また、４月以降は自動車部品の注文がぱったり無くなり、月曜と火曜の２日だけ働き、水曜から金曜は工場帰休、(週末を含め５連休)、こんな生活が１か月以上続きました。(会社はもちろん大赤字です）会社経営が気になるところですが、５月からは自由時間がたっぷり出来ましたので、ほとんど旅行者のいない青森県の主要観光地を車で走りまわりました。下北半島（大間崎、尻屋崎、寒立馬、恐山)、津軽半島（竜飛崎、十三湖、奥津軽今別)、八甲田山、十和田湖、おいらせ渓谷、八戸（種差海岸)、白神山地（十二湖、青池)、青森市、弘前市、地元つがる市など、青森県の観光ガイドに記載された場所は、この１年でほぼ制覇したと思います。

津軽地方を紹介する４点の写真を掲載します。順に、春の弘前城（弘前市/お堀の桜)、初夏のベンセ湿原（つがる市)、秋の大銀杏（深浦町/国内最大級)、冬の弘前城（雪灯籠祭り）です。いずれも自宅からは車で１時間以内の場所にあり、それぞれ季節を感じさせてくれる場所です。

６０歳を過ぎ、単身で津軽地方に赴任することは大きな判断でしたが、青森県は、自然との距離が大変近く、四季の食材も美味しく（しかも安価)、日帰り温泉も沢山あります。時間がゆっくり流れ、人が少なく混雑もほとんど無いなど（コロナ時代には安全安心)、落ち着いて仕事に専念し、ゆっくりと日々の生活を楽しむには良い条件が沢山そろっています。

ＪＲ五能線の陸奥森田駅から徒歩１０分ほどの場所に住んでおります。津軽方面（つがる市森田町）にいらっしゃる機会がありましたら、ぜひご一報下さい。

春　弘前城の桜
夏　ベンセ湿原のキスゲ
秋　深浦の大銀杏
冬　弘前城の雪

TUWV 現役生の近況と私自身の近況

29 期　田原 誠

昨年は、新入部員の大量入部に伴い在仙 OB・OG も何かの役に立てればと在仙 OB・OG 名簿の再整備を行い、私の方でメンテしながら情報共有をしつつ今まで以上に定期的な集まりを開催しようとしていた矢先に
コロナ禍による自粛が始まり、3 月に開催を予定していた在仙 OB 会も見送りとなっておりました。

その後の現役生達の活動は TUWV のホームページ　https://sites.google.com/view/tuwv-hourou/に掲載されておりますので詳細はそちらをご覧頂ければと思いますが、かいつまんでご報告しますと、大学からの課外活動自粛要請を受け、プレ山行や部室使用、対面での新歓活動等が中止となり、ワンゲルの活動の中心である夏合宿も中止となっておりました。

そんな中でもオンラインでの勉強会等の活動を地道に続け、秋口からは少人数での山行等が可能となり、延期していた旧錬も実施するというところまでこぎつけたとのこと。このような先の見えない活動の中で現 2 年生に数名の退部者が出たことは致し方ないことと思いますが、このような中でも新入部員を 3 名迎え入れることができたのは明るい兆しではないかと思います。

昨年、変則的に 2 年生で主将に就任した柳田君から、この 10 月には現 2 年生の内山君にが新主将に就任し、ウイズコロナ時代における新たなスタートを切った東北大学ワンダーフォーゲル部の皆さんに対し、今後も在仙 O B・OG として現役生と OB・OG との橋渡しをしつつ、付かず離れずのバックアップができればと考えています。

個人的には、仕事で周辺に訪れることが多かったものの今まで一度も登っていなかった磐梯山に、念願かなって今年の夏と晩秋の 2 回登ることができました。

別名『天鏡湖』と呼ばれる猪苗代湖の水面と裏磐梯高原の湖沼群がとても印象的でした。

次は春山の頃に訪れたいと思います。

写真上： 磐梯山中腹から見た猪苗代湖
写真下： 山頂から見た檜原湖(左)、小野川湖(中)、秋元湖(右)

荻原良子さんとの出逢い、そしてオギャ～との別れ

８期（昭和 44 年卒）　相原 敬

良子さんとの出逢いは、半世紀前のワンゲル時代にさかのぼる。いつからか皆んなにオギャ～と呼ばれ、控えめで自己抑制のきいた小っちゃくて可愛い娘という印象だった。お互いに寡黙な人間だったので付き合いは少なかったが、忘れ得ぬ一人として記憶に残った。

彼女は夫君である拓哉とザイルを結び、非力な身体ながら強靭な精神力に支えられたしなやかなムーブで、国内はもとより海外の岩壁に残した実績は素晴らしいものだった。私の住む高崎にもご夫婦で何度か足を運んでくれて、クライミングや紅葉の山で共に過ごしたことが懐かしく思い出される。

彼女からクライミングの話を聞いた覚えがないが、それは彼女の奥ゆかしさの一端を物語っている。自慢話は多々あると思うのに、彼女は自らを語らずいつも静かに相手の話を立てる人だった。６年前の初冬に、鷹取山のあと東京湾フェリーに乗って千葉に遊んだのがオギャ～と過ごした最後の二日間になった。東京湾に沈む真っ赤な夕日が強烈な残像となって記憶に残ると共に、多くの想い出が詰まった掛け替えのない楽しい時間だった。

人の一生は人格的な触れ合いが本質であり、自己を形成する過程は出逢う人の人格によるところが大きい。良子さんという素晴らしい人と出逢えたことは、私の一生の宝であると思っている。山仲間としてオギャ～を追悼し、在りし日の思い出を心に刻んで生きたい。

高岩に向かう道すがら 2010/5/29

妙義山・金鶏山筆頭岩を登る 2011/9/9

荒船山の紅葉狩り 2013/10/31

横須賀の家でご馳走になった翌日 房総・鋸山で 2014/12/14

佐藤良子さん（オギャー）を偲んで

８期（昭和４４年卒）前田 吉彦

今年の３月１日、拓哉から、良子さんの訃報が入る。ここ数年、彼女は病と懸命に闘い、拓哉はそれを全力で支えてきた。結婚 50 周年を目前に、入院中の彼女に高価な指輪を贈ったことも、2 日前に東大病院から、地元の病院に転院していたことも、拓哉からのメールで克明に伝えて貰っていた。言葉に表せないほど、残念で悔しい。

彼女は小柄で、どちらかというと寡黙で、どことなく気品があり、誰からも好かれ、学生の頃から親しみを込めて「オギャー」と呼ばれていた。

結婚後何年かして、私の故郷横須賀に拓哉と居を構えた。東京湾に面し、近くに猿島、対岸に房総半島が望める馬堀海岸に。この海岸は私が子供の頃、海水浴で遊んだ処。その当時は何も無い寒村だったけど、今はエキゾチックな町並みに変わっている。彼女はその馬堀海岸を「日本のコートダジュール」と呼び、愛してくれていたとのこと。元住人としては嬉しい限りである。

現役の時、一緒した山は少なく、４年時の夏合宿後の尾瀬縦断が印象に残っている。卒業後８・９期合同ＯＢ山行には何度か来てくれていた。最近、自宅で永年溜めこんだ写真を整理していたら、2005 年の尾瀬ＯＢ山行写真が、しかも拓哉と二人の写真が出てきた。

2005.9.10 尾瀬小屋にて

2005.9.11 尾瀬ヶ原にて

一人の山仲間を失った悲しみは大きい。いわんや最愛の伴侶であったオギャーを亡くした拓哉の深い悲しみに接する時、今もって掛ける言葉が見つからない。

「長い間、弱音を吐かず、頑張ってきたオギャー、安らかにお休み下さい」幸い子供達、孫達も近くに住んでいる、日本のコートダジュールで。

日本のコートダジュール

海を見つめるオギャー（遠景は猿島）

おぎゃーさんを偲んで

９期（昭和４５年卒）伊藤 千代子（旧姓櫻井）／ 健一

おぎゃーさん・・・・・いつも言葉少なでニコニコ笑っていた。
笑うときもコロコロ小さな声で楽しそうに身をよじる。
話をしている時、ウンウンとうなずいて自分はあまりしゃべらず聞いてくれる。
山は二年の夏合宿。苦しかった北岳の登り、美しくて楽しくてちょっとドキドキした塩見岳のピストン、ころがり落ちるような農鳥の下り。
その中でいつも安心感のあるサブリーダー。最高の合宿を中里さんと共にプレゼントしてもらった。
おぎゃーさん、ありがとうございました。心から感謝を込めてご冥福を祈ります。　＜千代＞

プレ合宿にて（後列左から３人目がおぎゃーさん）

夏合宿本番 “仙丈ケ岳をバックに”（右端）

“間ノ岳から農鳥岳を望む”（左端 おぎゃーさん）

荻原良子さんのことを、８期・９期の皆さんはみんな、“おぎゃーさん” と呼んでいます。メッチェンパーティで中里さんと二人並ぶと、迫力がありました。
本稿を書くにあたって、私が保存していたワンゲル年報 “報告”の９～１１号を見てみたのですが、おぎゃーさんの寄稿文が１１号（おぎゃーさん卒業年の最後の報告)、１３６頁にあるのを見つけました。報告を持っている人はほとんどいないでしょうから、以下に全文、転載します。

荻原良子 私は山や海が好きです。
けれど、私がワンゲルで知った喜びは、自然そのものからではありません。自然の中で育った仲間との “交わり”からです。
人と人とが手を繋ぎ合い、力を合わせれば独りではとても味わえないような大きな喜びを生み出すことができます。女性だけでアルプスを貫走した喜び、何日間もテントを背負って歩き続けた三陸海岸の思い出、そして四年間も何百日という山の生活、これらは皆、自分独りでは作れない思い出ばかりです。
ワンゲル生活をとおして感じたことは、こういう共同生活の喜び、人間の団結の尊さです。恐らく、将来ふり返ってまっ先に思い出されるものは、アルプスや東北の山々ではなく、その時一緒に喜びや苦しみを共にした友人一人一人の顔でしょう。

確かに、うちらがワンゲルの昔話をするとき、山とか海自体はもちろんいいのですが、あの時誰々がこうだったとかこんな面白いことをしてたとか、皆と行ったときのエピソードが必ず出てきて盛り上がります。
　皆と一緒であることのすばらしさを私は特に意識はしてなかったのに実際は、実にその通り。
おぎゃーさんは昔からはっきりわかっていたのですね。(千代ちゃんの思い出文―前出―を見ても、頷けるのです)。そんな感じの、皆がたくさんいる写真を持ってますので、最後に添付します。合掌。
＜健＞

１９６８年１１月３日？ 最終合宿（泉ヶ岳） **8**期・９期の集合写真（後列左から５人目が、“おぎゃーさん”）

オギャーを送って

８期（昭和４４年卒）佐藤 拓哉

今年の 3 月 1 日の早朝、オギャーは誰からも看取られることなく、一人で旅立った。病院に駆けつけた時、病室の入口にある心電図がフラットになっているのを目にした。オギャーを失った悲しみとともに、苦しまなくて済むようになった安堵感も交錯した不思議な気持ちであった。葬儀の日、一番好きだったツイードのジャケットを着せ、この 16 年間、肌身離さなかった大事なネックレスを首にかけて送った。

16 年前の 8 月 31 日、オギャーの誕生日に二人で北岳バットレスに向かった。バスの関係で、広河原を出発する時間が遅いので、初日は御池小屋に泊まり、翌日に登る予定であった。時間があるので偵察がてら、取付きまで登ってみたが、これがかなりの急勾配で、明日またここを登り返すのが嫌になった。もう既に昼近くになっていたが、抜けれない場合は岩壁の途中でビバークする覚悟で、登り始めた。リードを交代しながら第４尾根を登り終えた時にはすっかり暗くなっていた。おまけに濃いガスに包まれ、ヘッドランプをつけてもハレーションを起こしてしまって先は見えず、足元がかろうじて見えるだけである。頂上からの下りは、小太郎尾根を真直ぐ下っているうちは何とかなったが、小屋の手前で斜面を下るところがどうしても分からなかった。とにかく、大きい岩の先は何も見えず、断崖絶壁のように思えてしまう。これ以上歩くと危ないと思い、岩陰にロープを敷いて座り、ツエルトを被ってビバークすることにした。運悪く小雨も降ってきたが、不思議なほど焦りはなかった。これもオギャーの精神力の強さのお陰である。

落ち着いたところで、内緒で持ってきた誕生日プレゼントのネックレスを手渡した。目を輝かせて首に掛けた。この時のネックレスが、オギャーにとって永遠のネックレスとなった。これとともに、雨の中のビバークも、忘れ得ぬ一夜となった。翌朝、明るくなってから見たら、小屋のすぐ手前であった。
小屋で暖かいものを食べてから、お花畑の中を下山した。

オギャーとは、夫婦である前に、よきザイルパートナーであった。亡くなる数日前からは、二人で登った山のこと、二人で登った国内外の岩壁のこと、二人で旅したヨーロッパのことだけを話し続けた。
「拓哉さんとの楽しい思い出がたくさんあって嬉しい」、オギャーの最後の言葉であった。

北岳バットレスをリード

北岳頂上は濃いガスの中

秋田県・男鹿半島 入道崎で（2018 年 8 月）

訃報

2020 年 2 月、７期の山口正雄さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

2020 年 9 月、７期の高橋勝也さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

2020 年 3 月 1 日、８期の佐藤良子さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

不愛想で　素っ気なく
無口で 固く 社交性なく
女らしい心づかいも愛嬌もなく
妥協が嫌いで 単純で
矛盾だらけの世の中に笑って耐えるほどの
生命力を持たない
心細い私

（８期 卒業アルバムより抜粋）

新年会のお知らせ

新型コロナの感染者増加を考慮し、2021年1月に開催予定の新年会は中止とします。また開催できる日が早く来ることを祈ります。

＜2020年1月31日（金）新年会出席者＞
(S39)松木功 (S40)小原佑一、島崎質
(S41)相沢宏保、太田光二、門屋大二、櫻洋一郎、
渋川尚武、谷正美、八木真介、横松薫、横山雄一郎
(S42)加藤邦明、堤正尚 (S43)石川誠之、大木芳正、
大山幸則、金子清、菊谷清、高橋直樹、上田俊郎、
(S44)小笠原弘三、佐藤拓哉 前田吉彦、三原健治
(S45)石野好昭、原田博夫、桃谷尚安
(S46)田中康則、若佐則雄 (S48)神山文範
(S49)岡部安水 (S50)男沢弘 (S62)伊田浩之
以上３４名

今回の新年会は、新橋亭で金曜日に行うようになってからちょうど３５回目でした。土曜日に行っていたものを含めると、４５回目（はっきりしませんが）ほどになります。
もう少しで新橋亭と半世紀の付合いとなります。

TUWVOB会 2019年会計報告（東京口座）

（１）収 入		
	前回から繰越	３１２，２６８
	利息	２
	計	３１２，２７０
（２）支 出		
	現役へ資金援助	８１，０００
	次回繰越	２３１，２７０
	計	３１２，２７０

・ここ数年、入部する人が少なく、部の存亡の危機が続いていましたが、２０１９年は１０数名が入部しました。そのため装備が不足するという事態になり、ＯＢ会から資金援助しました。
・「若い人の参加を促すために」、平成に卒業した方の新年会の会費の半額は新年会の残金から補助しています。

残金が不足した場合は、OB会の会計から補助することとしています。

★★ 事 務 局 より ★★

✧ OB 会報 51 号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。
✧ メールアドレスが変更になった方は１ページ目のメールアドレスまでご一報下さい。

✧ この会報は原則として OB 会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。これまでメールアドレスが分からない方には郵送してきましたが、原則として郵送は終了しました。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉
239-0801 横須賀市馬堀海岸 2-23-14
Tel 046-841-8622